

《企画ワークショップ》

学習者の主体的な学びを支援する ICT ツールの活用法とその実践例

松井夏津紀（京都先端科学大学）

ラムスデン多夏子（京都外国語大学）

近藤暁子（兵庫教育大学）

コロナ禍に伴い遠隔授業の導入が広範囲に行われるようになり、大学教育における ICT 活用が急速に進展した。そのため、多くの教員が、教授法や教材の配付方法、学習者とのインタラクションなどの面で、従来の授業スタイルから大幅な方向転換をすることになり、教員自身が新たな学びを得る機会となった。本ワークショップでは、発表者の各々が行ってきた様々な試行錯誤から、学習者の主体的な学びを支援するのに有効だと考えられる ICT ツールを取り上げ、それらを活用した実践例の報告を通して、英語教育の現場における ICT 活用法を提示する。

松井は、クラウドツールの活用で協働学習要素を取り入れることが可能となった授業外学習課題の実践を報告する。Google Spreadsheet を利用した課題は、翻訳、TOEIC、発音などの様々な授業で応用できる自律的学習を促す学習法であるが、本ワークショップでは TOEIC 科目と発音科目での利用例を取り上げる。また、One Drive を利用した授業外課題については、多人数クラスでの自己紹介課題について報告する。

ラムスデンは、ウェブサイトの簡易作成ツール Google Sites を用いた授業内 PBL (project-based learning) の実践を報告する。クラス全員の学習成果を集約したウェブサイト *Bilingual Movie Guide* の作成を最終目標とするプロジェクトで、Google Spreadsheet で学びのプロセスを共有しながら行うグループ活動を主とする。本ワークショップでは、各ツールの使い方を紹介しながら、本 PBL の実践例を報告する。

近藤は、ICT を活用した発音指導実践を報告する。教養科目としての英語の授業では、時間的な制約もあり、発音指導に時間を割くことは難しいという課題がある。そこで、授業外の学習と授業内での短時間の学習（帯学習）をリンクさせることで、通常のカリキュラム内に発音指導を組み込み、より効果的な発音指導を行うことが可能となると考える。本ワークショップでは、具体的なカリキュラムと教材作成方法（動画作成アプリ：mmhmm studio）と教材共有及び取組状況の管理方法（LMS アプリ：leaningBOX）を紹介する。

《シンポジウム》

メディアでひもとく英語イディオムの世界

倉田誠（京都外国語大学）

飯田泰弘（岐阜大学）

吉川裕介（京都外国語大学）

本シンポジウムでは、2名の発表者が「メディアでひもとく英語の世界」という共通のテーマで英語のイディオムと構文イディオムについて発表を行う。このコンセプトは ATEM 西日本支部の「映像メディアと英語」の枠組みを広げたものであり、映画、新聞、雑誌、大学入試問題、TOEIC 問題等々の様々なメディアを使い、理論言語学の研究成果を英語教育に還元する試みの一試案である。本試みは『映画でひもとく英語学』(くろしお出版)から始まり、現在では英和新聞 *Asahi Weekly* のコラム「メディアでひもとく英語の世界」で実践している。本シンポジウムでは、英語のイディオムを発表の中心に据え、現在 *Asahi Weekly* でコラム執筆を担当している研究者の講演を通して、理論言語学と英語教育の接点について具体的な提案をする。

飯田泰弘氏の発表では、メディア上の実例を通して、英語のイディオムの多様な振る舞いを観察し、英語教育への応用を考える。イディオムの特徴には、(i)その意味が各語の総和からは出てこない (non-compositionality) や、(ii)統語上の変形を許さない (transformational deficiency) などが挙げられるが、映画や海外ドラマでは、これらの特徴に沿わない実例も見つかる。そのような興味深い実例を通して、ことばの柔軟性を感じて味わい、日本の英語科教育で活用する方法を考える。

吉川裕介氏の発表では *One's way* 構文を取り上げる。*One's way* 構文とは、(1)にあるように動詞の後ろに所有格を表す *one's+way* が続き、そのあとに前置詞句を用いて場所を示す表現のことを言う。

(1) When his name was called, Alex made his way to the stage.

One's way 構文は「困難性」と言う構文独自の意味を帯びることが多く、また目的語位置は *one's way* で固定されていることから、Jackendoff(1990)などでは *One's way* 構文を構文イディオムと呼んでいる。本発表では、言語類型論の観点から英語の移動構文の特徴が *One's way* 構文の合成性に大きな影響を与えていることを指摘する。

《著作権特別企画》

授業における映像メディアの活用と著作権

甲野 正道（大阪工業大学）

教育における著作物の利用に関しては、著作権法 35 条 1 項によれば、授業の過程における利用に供することを目的とする場合には、必要と認められる限度で公表された著作物を複製することや公衆送信することができる。この規定が存在することで、大学教員は、教材中に様々な著作物、例えば新聞や雑誌の記事を用いて、それをレジュメとして配布したりオンラインで送信したりすることが可能となっている。しかし、条文の文言には、「著作権者の利益を不当に害することとなる場合は、この限りでない」など、明確とはいえない部分があり、現実には著作物の利用について、どこまでが適法なのかどうか不明確な点が少なくない。

この点に関しては、2020 年度に著作権法の改正法が施行されて授業の過程で利用する目的での著作物の公衆送信」ができるようになり、翌年度から教育機関の設置法人が公衆送信利用に係る補償金の支払いの義務が生じたことに伴い、各種の解説書が発行されるようになっている。

また、教育関係の団体と著作権者からなる団体が、「著作物の教育利用に関する関係者フォーラム」を設置して 35 条の解釈について検討を続けており、その成果として「改正著作権法第 35 条運用指針（令和 3（2021）年度版）」が公表されている。

更に、映画を教材として用いる場合には、映画の著作権が問題になるが、映画自体の著作権について保護期間が満了したとしても、映画に用いられた脚本は独自にそれを利用する場合には映画の権利が満了後にも権利が残る場合が少なくないなど、著作権法上留意すべき点が少なくない。

そのようなことから、本講演は、著作権法 35 条の解釈及び映画を教材として利用する場合の留意点について取り上げ、映像の英語教育への利用を適切に行うことができる一助としたいと考えている。

《西日本支部 20 周年記念大会特別講演》

コーパス言語学から見た語彙指導のあり方

—Every word has its own grammar—

赤野一郎（京都外国語大学名誉教授）

イギリスの言語学者、ジョン・シンクレア（John Sinclair; 1933-2007）はコーパスに基づく語の分析を通して、語の振る舞いに関して次の3点を主張しています。①語は一定の語と優先的に結合しパターンをなす。②語は複数の異なるパターンを有する。③語の意味とパターンは互いに関係し合い、語の意味の相違はパターンの相違になって現れる。語のパターンと意味の相互関係をもとに、さらにシンクレアは概略「語は1つ1つが互いに独立して機能しているのではなく、頻度が高く、ある程度固定し予測可能なより大きな単位の一部として機能している」と主張します。これをテキスト生成の観点から見ますと、私たちはブロックをならべるように文法規則に従って語を1つ1つ配列して文を組み立てるのではなく、意味の固まりであり、複数個の単語からなる句表現 (phraseology) を丸ごと1つとして選択し、文を組み立てテキストを生成していると言えます。シンクレアはこれを「イディオムの原理」(the principle of idiom) と呼び、テキスト生成の中心的原理であるとしました。

本講演ではこのシンクレアの主張と原理の正しさをコーパス分析の事例を通して明らかにします。次いで日々の授業で新出語の説明や単語の覚え方に関して、句表現、とりわけコロケーション重視の語彙指導のあり方、及び指導の留意点についてお話します。これに関連して学習英語辞典についても触れます。

《研究発表・実践報告》

〈研究発表〉

映画『美女と野獣』などを用いた仮定法と依頼表現の習得 —国際系学部に所属する日本人英語学習者の場合—

松浦 加寿子（倉敷市立短期大学）

本発表の目的は、映画を活用してポライトネスの観点から仮定法と場面に応じた依頼表現の指導を行うことが、効果的な指導法になり得るか実証する。また、仮定法の定着と語用論的能力の向上に与える教育的効果について明らかにしたい。

本発表では、国際系学部の大学3年生を調査協力者とし、映画の仮定法と依頼表現の場面を視聴後、英会話などのアクティビティを通して仮定法と依頼表現の定着度とアンケートの結果について調査並びに報告する。今回、調査対象となる仮定法の表現は、仮定法過去と仮定法過去完了であり、依頼表現は主に“Will you ...?”や“Can you ...?”といった一般的なものを含む。仮定法に関しては、条件節との違いを見極めるとともに仮定法過去と仮定法過去完了の習得を目指す。依頼表現に関しては、事前アンケートでは、主にさまざまな依頼表現を丁寧度に応じて並べ替えるように指示し、事後アンケートでは、映画を活用した仮定法と依頼表現の指導法の感想などについて尋ねた。また、依頼表現の事前テストでは、映画から抜粋した依頼表現について、日本語と英語で書くように指示し、事後テストでは同様の問題を使用して依頼表現の定着度を測定した。具体的な指導に関しては、ポライトネスの観点から発話者間の力関係や距離によって依頼表現が異なることを示した。指導の際に用いた映画は、『美女と野獣』（*Beauty and the Beast*, 2017）と『僕のワンダフル・ライフ』（*A Dog's Purpose*, 2017）である。これら2本の映画は、セリフが日常生活を中心とした会話から成り立っていること、さらに発話者間の社会的立場や状況が分かり易いことから依頼表現を習得するのに適していると考えられる。本研究を通じて、映画を活用した指導が学習者の英語運用能力の向上とともに、発話者と相手の社会的立場を考慮した依頼表現を習得することで良好な人間関係の構築に寄与すると考えられる。

〈研究発表〉

『幸福な王子』(1888)の政治性と社会改良への社会思想を テキストと映像を通して理解する力を育む

河野弘美 (京都外国語短期大学)

本発表は、オスカー・ワイルド (1845-1900) の短編小説『幸福な王子』(1888) に宗教的な救済のメッセージがあることに加え、社会改良を訴える政治性が内在する事を、テキストと映像を使用しながら読み取ることを目的としている。『幸福な王子』は、児童文学に位置付けされることにより寓意物語と解釈されることが多い。そのため、人間の道徳心をたゞす教訓物語としての意味合いが反映されている作品として理解される傾向が強い。しかし、『ヴィクトリア朝の文芸と社会改良』(2011) で向井秀忠が「貧富の格差の問題こそがこの作品 (『幸福な王子』) の中心的なテーマと思えてくる」と指摘しているように、資本主義の台頭により二極化したイギリス社会の貧困問題が本作品では浮き彫りになっており、宗教的な救済の枠を超えた国家レベルの問題対策が必要であり、社会システム改良への政治性が強く反映された作者オスカー・ワイルドの思想が込められていることが解る。

本発表では、映像 (VHS) 『幸福な王子』 (*The Happy Prince*, 1987) と『幸福な王子』(1888) の英語版テキストを使い、19世紀イギリス社会を理解し読解する学習方法を提案し、社会システム改良への政治性を読み取ることを目的とする。英文学の読み手は、物語を原書で最初読み内容を想像し、映像で展開される確固たるイメージと内容をつなぎ合わせ、内容理解をすることができる。英語学習者が英文学を読む際、英語そのものの難易度により読解が困難なケースがある。また、内容がイメージできず、内容理解が不可能となることもある。しかし『幸福な王子』の英文は比較的シンプルで理解しやすく反復した英語表現が使われているため、英語を読み、聴きながら、内容を想像し、映像を通して情報を読み取り、情報に解釈を加える英語学習のハードルがより低く、ワイルドが発する社会改良へのメッセージを読み解くことがよりしやすい利点がある。その学習方法を本発表では提案していく。

〈研究発表〉

作品理解が言語学習に拓く可能性
—英語版『千と千尋の神隠し』(*Spirited Away*, 2001) から考える受け身表現—

梶原まどか (京都先端科学大学)

日本人英語学習者が抱える問題の一つに、受け身表現の過度な使用がある。これには先ずは日本語と英語の本質的な言語の差が影響していると考えられるが、多くの研究者が指摘する、コンテキストを無視して機械的に能動態と受動態を書き換えるという学習法が、これらが完全に代替可能であるという錯覚を引き起こしているという点は確かに考えられる要因の一つだろう。

そこで本発表では、日本人学習者の多くが英語を使用する際に無意識に受動態を多用してしまっている事実を学習者自身に認識、体感してもらう手段として作品理解という文学的アプローチを提案する。これは、(1) 日本語と英語の言語的性質によって生じるギャップを学習者にとってより親しみやすい形で提示すること、(2) 学習者になぜその文脈において受動態が用いられているのか(あるいはその逆)について考えを巡らせてもらうことによって英語における受動態の本質に迫ってもらうこと、を目指すものである。

本発表ではアニメーション『千と千尋の神隠し』(*Spirited Away*, 2001) を取り上げ、その日本語版、英語版を見比べる。各々のセリフを並べてみることで先ずは日本語と英語の間にある根本的な性質の違いを明らかにしたい。その中から、特に日本語では能動態で表現されているが英語では受動態で表現されている例を取りあげ、それらの文が共通して明確な行為者を持たない文であることを確認する。更にこの部分を作品内容と絡めて掘り下げ、そこに作者(訳者)の“行為者がある程度不明確にしておきたい”という意図が見えること、加えてその背後には作品の最たるテーマである「神」の存在が見え隠れすることを指摘する。最後に改めて、これらの考察を導く糸口が日本語と英語の言語的特質から生まれる差異に着目したことであったことを確認し、言語学習と作品理解の間に見られる相互作用を明らかにしたい。

〈研究発表〉

and 句内における人称代名詞の主格・目的格交替について
—映画・海外ドラマからの実例を中心に—

三村 仁彦（帝塚山大学）

くだけた話し言葉では、等位接続詞 and によってつながれた主格の 1 人称単数代名詞 I が目的格の me で代用されることがある。

- (1) a. 『ロケットマン』 (*Rocketman*, 2019) <01:17:08>
You may still be my manager, but you and **me** are finished.
- b. 『ジュディ 虹の彼方に』 (*Judy*, 2019) <01:32:15>
There's a tree, and **me** and you are at the bottom.

その際、後続する動詞の形は主語である and 句と複数で一致するのが基本だが、それが見られないこともある。

- (2) 『パブリック・エネミーズ』 (*Public Enemies*, 2009) <01:01:50>
You and **me**'s going places.

前者については一般的な学習用英和辞典や英文法参考書にも記述が見られるが、後者については触れられていないのが通例である。しかしながら、これらの事実は本来その環境下で期待される形式とは異なるという点で理論としての英文法にとって問題であり、かつそのようなくだけた話し言葉に免疫のない学習者の混乱を招く可能性があるという点で英語教育の観点からも問題であると考えられる。そこで本発表では、映画と海外ドラマのセリフから採取した豊富な実例を基に当該の表現形式について記述的な分析を行い、いわゆる学校文法の枠組みを超えた実際の英語の姿の一側面を概観することで、理論としての英文法と教育現場における英語教授法の今後の発展の一助となることを目指す。具体的には、前述の実例から下記 (3) と (4) を明らかにし、その上でそこから生じる文法理論における問題点と英語教育上の問題点についてそれぞれ指摘・考察する。

- (3) 目的格によって代用される主格の人称代名詞は 1 人称単数に限らない。

『ハリー・ポッターと謎のプリンス』 (*Harry Potter and the Half-Blood Prince*, 2009)

<00:56:43>

Him and Dad *don't* get on.

- (4) 動詞との一致について、目的格で代用されている代名詞が **and** 句内に 1 つであれば原則として **and** 句とそれに続く動詞は複数で一致するが、2 つとも代用されている場合は単数で一致する率が高くなる。

『ノー・カントリー』 (*No Country*, 2007) <00:00:47>

Me and **him** *was* sheriff at the same time, *him* up in Plano and *me* out here.

〈実践報告〉

高等学校における留学生への学校紹介動画作成活動の実践報告

森岡千廣（京都先端科学大学）

本発表では、筆者がコロナ禍で行った高等学校における英語での動画作成プロジェクトについて、その実践内容、効果、課題について述べる。

大阪府下のある私立中高一貫校では、短期交換留学プログラムが盛んに行われていたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、留学生の受け入れサポートを主な業務としていた国際交流委員に学びを提供できる機会が失われてしまった。そこで、委員会に所属する生徒のうち15名（中学校第一学年から高等学校第二学年）に対する異文化理解教育や英語教育の一助とすべく、「コロナ収束後に受け入れる留学生に向けた学校紹介動画（英語）の作成プロジェクト」を実施した。ねらいは以下である。

①言語教育的ねらい

：目的を持った言語使用による動機付け・英語産出能力の向上、動画を撮り直す過程での発話力の伸長、「伝える」意識を持つこと

②異文化教育的ねらい

：慣れ親しんだ学校を「留学生」という別の視点で見ることによる気づき、留学生に自分の学校を紹介することで外国人に親近感を持つこと

生徒はグループに分かれ、昼休みや放課後の時間を使って動画の構成や内容について話し合い、英語原稿を書き、各自で撮影・録音・編集を行った。

動画完成後、国際交流委員会所属生徒33名で鑑賞会を行い、活動から得た学びについての事後アンケートを実施した。その結果、英語力や英語学習に対する動機付けの向上、外国人に対する前向きな意識づけについて大半の学生が「効果があった」と回答した。学校への愛着やICT技術の向上についてもおおむね肯定的な結果であった。感想文からは、他のグループの英語や動画の工夫と比べることで、自身の英語や動画の撮影・編集等について内省している記述が多くみられた。一方、実際に動画作成係に当たっていなかった生徒からは、「完成度が高く驚いた」「留学生に喜んでもらえそう」などといった感想が多く寄せられた。

〈実践報告〉

幅広い学生に対応可能な映画を使った授業方法の実践例
ーリメディアルクラスから必修クラス、多学部・多学科の
学生からなるクラスまでー

小谷 早稚江（帝塚山大学）

本発表では、必修科目としての英語クラスだけでなく、多学部多学科に所属する学生からなるクラスや、再履修・リメディアルクラスにも対応できる、映画を使った授業の実践例を紹介する。さらに、アクティブラーニングやプレゼンテーションを意識したクラス運営が求められる中で、映画を教材として使った授業設計を行うことで、学生がより活発に意見発表ができ、英語が苦手な学生でも授業に参加しやすい課題づくりが行えることを述べる。

発表内容としては、『スクール・オブ・ロック』(School of Rock, 2003), 『キューティ・ブロンド』(LEGALLY Blonde, 2001), 『しあわせの隠れ場所』(The Blind Side, 2009)の3本の映画を使った、半期15回の授業計画と成績評価を含む授業概要を紹介した上で、実際の課題例を映画のシーンを見ながら紹介する。この3本の映画にはいずれも授業で使用しやすい特徴が備わっているが、中でも『しあわせの隠れ場所』は、英語学習教材として、再履修・リメディアルクラスから必修クラスまで幅広く利用できる要素が多く、実話に基づいた映画であるため、現代アメリカの文化だけでなく、社会問題なども学ぶことが出来る。そのため、英語に苦手意識を持つ学生でもその問題点に気づき、日本社会とも比較しながら考え、これまで抱いてきたアメリカ社会に対する印象や思い込みから離れ、現実にも目を向けるきっかけとなる要素を多く含んでいる。その点も重視して作成した、異文化理解を目的とする客観的意見を求める課題例や、標準英語ではないアフリカン・アメリカン英語のセリフなども紹介する。

また、必修クラス、再履修・リメディアルクラス別の課題の展開方法と、アクティブラーニングを意識した、追加で行えるプレゼンテーション課題を紹介し、これまでこの形式で実践した授業の単位修得率と受講した学生からのコメントをいくつか紹介する。